

III, 1952, p.30.

- (19) Daniel Defoe : *The Life and Adventures of Robinson Crusoe*, p.140.
- (20) Samuel Richardson : *Pamela*, Vol. II (Everyman's ed.) p.5.
- (21) Daniel Defoe : *The Fortunes and Misfortunes of the Famous Moll Flanders*, (Pocket Books ed.) p.61.
- (22) Cf. Kunio Terai : *Samuel Richardson*, 1933. (研究社英米文学評傳双書No.20) p.92.
- (23) E. M. Forster : *Aspects of the Novel*, 1927. 米田一彦訳「小説とは何か」1954, p.72.

tic な小説を作り出したことも亦至極尤もなことである。小説の取つた第一の立場は anti-romantic ということにあつた。作家達は新しい時代の思想、行動の表現の場を小説に見出したのである。かくて「小説は歴史よりも真実に」⁽²³⁾ 社会的背景を描写したと言えよう。

〔註〕

- (1) 本稿は日本英文学会第26回大会に於て発表した小論『イギリスに於ける小説の成立と庶民の生活について』の補遺として考えて見たものである。
- (2) B. Ifor Evans : *English Literature*, 1948, p.24.
- (3) Roger P. McCutcheon : *Eighteenth-Century English Literature*, 1950, p.1.
- (4) Daniel Defoe : *The Life and Adventures of Robinson Crusoe* (George Routledge ed.) p.6.
- (5) Ibid., p.3.
- (6) Ibid., p.2.
- (7) John Bunyan : *The Pilgrims Progress* I (Kenkyusha Eng. Classics), p.176.
- (8) Leslie Stephen : *English Literature and Society in the 18th Century*, 1904, p.40.
- (9) Cf. G. M. Trevelyan : *Illustrated English Social History*, Vol. III, 1952, Chap. I Defoe's England.
- (10) Arnold Kettle : *An Introduction to the English Novel*, 1951. p.30.
- (11) Cf. Takeshi Saito : *A Historical Survey of English Literature*, 1946. p.212.

「……簡潔な文章の調和が重んぜられ、そしてこの理想は第十八世紀に及んで殆んど実現される。この主張はひとり学術上のみならず、説教に於ても採用され、John Tillotson, Archbishop of Canterbury (1630—94) の明快簡素な散文は Dryden が文体の模範として学んだものと激賞され……」

- (12) *The Tatler*, No. 181, 6 June 1710.
- (13) Sir Walter Raleigh : *The English Novel*, 1925. pp.141—142.
- (14) 近藤いね子著「イギリス小説論」1952, pp.7—8.
- (15) G. M. Trevelyan : *Illustrated English Social History*, Vol. III, 1952, p.1.
- (16) Cf. T. S. Ashton : *The Industrial Revolution* (1760—1830), 1950, pp.3—4.
- (17) (18) G. M. Trevelyan : *Illustrated English Social History*, Vol.

carry you out, you shall travel like a duchess.' ”

そこで、linen-draper にすぎない俄殿様は、立派な六頭立の馬車を傭い、御者と馬丁もきまり、羽根飾のついた帽子を冠つた小姓が馬に乗つて従うというわけ

で、

“The servants all called him my lord, and the inn-keepers, you may be sure, did the like, and I was her honour the Countess, and thus we travelled to Oxford, and a very pleasant journey we had....”(21)

オックスフォードでは、方々見物をしたり、又おどけたことには、大学の Fellows を訪ねて甥の進学について語り、tutor になつてくれと相談をしたり、殿様ぶきの牧師になりたいという学生をからかつたりする。こんなふう到大尽ぶりを発揮して12日間遊びまわり、93ポンドを使い果たして帰宅する。其後夫は破産して、ついに逐電する運命になる筋は、一面享樂的な十八世紀の氣風を示す picaresque novel として興味があるが、又他面呉服屋のおやぢでも一夜大名を夢みる不逞な精神に我々は目をみはるのである。

贅沢と享樂は、今や庶民の手のとどく所にもあつた。この様な環境においては、たくましい生活意欲の精神が生まれてくる筈である。Robinson Crusoe が ‘Island of Despair’ に於ても少しも暗い影を残さないことや、Pamela が誘惑の手に翻弄されても、深刻な憂愁を感じさせないのも、初期十八世紀人の明るい時代精神の現われかと思う。この明るい精神のたくましさは、無人の境地でも唯我独尊の生活を享樂させ、女中の身分にも squire の夫人になれる自信を与えたのだらう。

又此等の作家が元来メリヤス商人とか瓦商人或は印刷屋という amateur が、いつとはなしに小説を書き出した社会人にすぎなかつたことが、彼等の作風を一層実利主義に徹したものにしたとも言えよう。正妻という反対給付で「大切な宝、貞操」を与える *Pmela* の功利的な plot も、そこから生まれて来るのである。更に此等の小説の持つ浅薄な倫理性も当時の時代相の表出の一つであつて、Richardson は自ら「私は元来小説又はロマンスを書く心算はない。私の小説は主として教化の手段と見做さるべきものである。」(22) という意味のことを述べている位である。このようなやや偽善的な道義観も当代の時代精神の一種だと思われる。

6

農業に社会の基礎をおく中世の封建制度では、少数の支配階級だけが土地と農奴の私有に依つて、社会的優越を維持した。彼等の富と権力は技術や科学に依存しないので、彼等独特の文学形式として、非現実的なロマンスが発達したことは、理の当然なことと言える。然るに十七世紀末から、十八世紀はじめにかけて、商工業という新しい職域に進出したブルジョアが、封建的秩序から自由を獲得するために、feudalism の面からロマンスの veil を破つて、彼等自身の生活を描いた、realis-

Cheshire cheese ; in his shop for two hours then a neighbouring coffee house for news ; shop again, till dinner at home (over the shop) at 12 on a 'thundering joint' ; 1 o'clock on Change ; 3, Lloyd's Coffee House for business ; shop again for an hour ; then another coffee house (not Lloyd's) for recreation, followed by 'sack shop' to drink with acquaintances, till home for a 'light supper' and so to bed, 'before Bow Bell rings nine.' "(18)

と言うわけで、まるでコーヒーばかり飲んでた勘定になるが、それは 'wealthy' mercahnt に限るのであつて、コーヒーや紅茶はどこの家庭でも口にされるまでには、まだなつていなかつたということである。

然し飲酒は凡ゆる階級に行き渡つた風習で、エイルが一般に愛用されたと言われている。又煙草は陶土製の長パイプで吸われていたが、西南諸州では、男も女も子供達でさえ、夕の一杯をくゆらしていたとのことである。喫煙の習慣は執拗なもので、無人島の不自由な生活の中でも、Crusoe は粘土でパイプを焼き、'very ugly, clumsy thing' にしか出来なかつたが、どうやら煙は吸えるので "I was exceedingly comforted with it, for I had been always used to smoke." (19) と喜こんでいる。嗜好品でさえ豊富にあるので、其の他の一般の物資の豊かさはたやすく想像できる。田舎の百姓の暮しをしている Pamela の両親も娘への手紙の中で、彼等の満ち足りた生活を次の様に述べている。

"....in this happy dwelling, and this well-stocked farm, in these rich meadows, and well-cropt acres, we look around us, and which way soever we turn our head, see blessings upon blessings, and plenty upon plenty, see barns well stored, poultry increasing, the kine lowing and crowding about us....." (20)

次に、Newgate 監獄の女囚人の子として生まれ、六十の老婆となるまでに、12 年間は売春婦で、五度は人妻（その中一度は彼女自身の兄の妻）、12 年間は盗賊、8 年間はヴァージニアへ流刑という大変な経歴を持つあばずれ女を描いた *Moll Flanders* の女主人公が、二度目の夫と大名旅行に出かけるくだりを引合に出そう。

".... 'Come, my dear,' says he to me one day, 'shall we go and take a turn into the country for about a week ?' 'Ay, my dear,' says I, 'whither would you go ?' 'I care not whither,' says he, 'but I have a mind to look like quality for a week. We'll go to Oxford,' says he. 「どうして行きます？私馬には乗れないし、馬車で行くには遠すぎる」と逡巡すると、

" 'Too far !' says he ; 'no place is too far for a coach-and-six. If I

それでは、これ等の初期小説に反映した中産階級の生活と物の考え方を瞥見して見よう。

“When a survey is demanded of Queen Anne’s England and its everyday life, our thoughts turn to Daniel Defoe, riding solitary and observant through the countryside.”⁽¹⁵⁾

と Trevelyan は「英国社会史」の中で書いているが、Defoe はブリテン国を跋渉するのが仕事の一つであつて、各地で得た情報を彼の patron であつた Oxford 伯 Robert Harley に宛てた報告文に作つたのである。彼の眼に写つた当時の英国は、商業繁栄の時期到来に、歓呼の声を挙げていた時代であつて、其後彼が書き上げた *Robinson Crusoe* や *Moll Flanders* も場面は、無人島や盗賊の住居に変わつても、やはり当時の日常生活の形を変えた記録文学と見るべきものだろう。

十八世紀の社会相を適確に捕えた T. S. Ashton の *Industrial Revolution* を参照すると⁽¹⁶⁾、産業革命の黎明期から、英国民の死亡率は減じ、出産率は増して、著しい人口増加の傾向が現われはじめたということである。その原因を Ashton は衣食住の三方面から考察して、まず食糧は營養の多い小麦がこれまでの雑穀にかわつて、パンに多く用いられ（大麦はエールとビールに用いる麦芽を作るために生産された）、おまけに野菜が豊富に消費されることが、疾病に対する抵抗を増した。又この頃から石鹸を用い安い木綿の下着を着用して、清潔な生活をするのが、伝染病の危険を少くし、又住居については、木材の壁のかわりに煉瓦が、藁屋根のかわりにスレートや石が用いられ始めたという事が、悪疫を減じたというのである。こういう物質生活の向上は、勿論 Defoe 時代より少し後のことであるが、社会の変遷は急激に起こるものではないので、その兆候は既に彼の頃からきざして居たと推定してよからう。*Crusoe* が孤独の生活の中で大麦をまき、これを収穫してパンを焼き、羊肉のスープを作り、ラム酒をたしなんでいた暮らしは、さながら十八世紀初頭の英国社会の縮図である。

当時の日常生活のゆとりを嗜好品の点から調べて見ると、East India Company (1600 年創立) に依つて輸入される紅茶やコーヒーは、少くとも富裕な階級の間では日常の飲物となつて居た。例の London の Coffee House は社交界の中心で、アン女王時代には三千の珈琲店があつて、知名の士は夫々のひいきの店に集り、行きつけの時刻にそこに訪ねたら、面会が出来るという具合であつた。それだから、

“Remember, John, / If any ask, to th’ Coffee House I’m gone,”⁽¹⁷⁾

と小僧に言いのかして、商人は外出したというのである。このような商人の一日の生活は、1706 年出版の Ned Ward の *Wealthy Shopkeeper* に依ると、

“...rise at 5 ; counting-house till 8 ; then breakfast on toast and

が貴重な歴史的記録として残っているが、これは文学作品としても **unique** のものであり、特に **Pepys** の日記は、当時の大事変と共に公表をはばかる個人的な感懐も赤裸々に残してあるので、小説の素材たるべきものが多いが、惜しいことに両書とも十九世紀になつて、解説、公刊されたので、十八世紀の小説文学には全くつながりがなかつたと言える。

劇文学が衰頹したことも、小説の発達を促す間接の動機となつたことを見逃すことは出来ない。周知の様に、**Cromwell** の共和政府の成立する数年前、正確に言うと 1642 年に、議会に勢力を持つ **Puritan** は、彼等の禁欲主義の立場から、演劇を罪惡視して、劇場閉鎖令を發布した。この後 1660 年に、**Charles** 二世が即位して王政が復辟するまで、18 年間というものは、**London** 人は芝居を見る機会を完全に奪われたわけである。**Restoration** の時代になつて、**Molière** のフランス喜劇の影響を受けた劇作家達は、**Puritanism** のゆとりがないまでにきびしい道徳と信仰に対する反動として、軽妙洒脱な喜劇を盛んに書いた。所謂 '**comedy of manners**' が時勢の波にのつて勃興したが、これ等の喜劇は **Molière** 風のユーモアよりも、淫猥な世相を描いて、ひたすら時代の好尚に迎合した。かくして演劇の墮落は十八世紀初頭に及び、わずかに **Goldsmith** と **Sheridan** が中葉以後に優れた喜劇を書いた以外には、**Barrie** や **Shaw** が出るまで、一世紀以上に亘つて、本格的な英国劇は現われなかつたとさえ極言されるまでに、衰微したのである。こうして十八世紀に入ると、**Shakespeare** 以来の伝統を持つ英国の演劇も、文芸の王座を離れて、小説文学がかわつて登場しつつあつたのである。この辺の事情を **Sir Walter Raleigh** が興味深く解説して居り⁽¹³⁾、又それを近藤いね子氏が適切に引用して居るので、孫引ではあるが、思いきつて借用することにしよう。「当時の流行社会の貴婦人達は、最初の二幕位の間はお仕着せをつけた侍僕を代りに座らせておき、それからおめかしをしてやつて来て、舞台にはお構いなしに大声で笑つたり話したりするのが常習であつた。……こうした中にあつて唯一の真面目な観客であつた平土間の常連——若い法律家や商人達——も劇の墮落を救うことが出来なかつた。……一方 **Shakespeare** その他の劇を読むことは盛んに行われ、こうした読書趣味が自然に小説に移つてゆくことになつたのである。**Richardson** の *Pamela* にも *Clarissa Harlowe* にもその巻頭に登場人物の名が列挙されて居り、小説が如何に劇の代用物として、'芝居のト書を読者のために敷衍したもの' として登場したかが窺われるのである。」⁽¹⁴⁾

こうして成立した英国初期小説の思想的背景としては、**Lock** を出発点として後代の **Barkley** を通り **Hume** に到る英国実証哲学の精神が、**backbone** になつていることを忘れてはならない。更に此等の作品の持つ過剰な倫理性、鼻につく道学臭は何れの国の初期小説にも、多少とも見られる特質であつて、我国の写実小説発生以前の馬琴の観善懲惡の小説などにも通ずるものと考えられる。

taigne の *Essais*, 1580 を起点として Pascal の *Pensées*, 1670 に流れる系列を見るが、英国では Montaigne の「随想録」の発行後 17 年して出た Bacon の *Essays* が大体大成された最初の作品とされている。|「学問について」、「真理について」、「死について」、「愛について」、「友情について」、「結婚と独身生活について」と言つたような人生経験に関する叢智にあふれた文章である。彼の散文の形式は十七世紀中葉の Sir Thomas Browne を経て、十八世紀の Dr. Johnson を始め多くの作家達の散文作品に系列を引くと言われているが、此等の essay 文学の初期の作品には、教訓的に傾いたものや、功利的な物の見方を含んだものも多いが、概して人間の性格に関する興味を主題としている点では、やがて小説の性格描写へと発展して行く契機を作つたものだと言えよう。

更に人間の社会生活に対する関心は、定期刊行物の発行という形で現われた。英国の最初の periodical は *Coranto* と言う news-pamphlet で、既に 1621 年に創刊されて、6 年間の中断期はあつたが、1641 年まで 20 年にもわたつて発刊された。十八世紀になつては、例の Defoe の *Review* を先駆として、Steele と Addison の *Tatler*, *Spectator*, *Guardian* が発行されたことは周知の通りである。此等の periodicals は今日の報道本位の新聞とは異なり、文学的な essay や寓意談なども掲載されて、文学史の上で特異な存在をなすものである。例えば Steele の 'On the Death of his Father' と題する periodical essay の冒頭など、全く後代の short story の趣をしるばすものがある。少し長いが引用して見よう。

"The first sense of sorrow I ever knew was upon the death of my father, at which time I was not quite five years of age; but was rather amazed at what all the house meant, than possessed with a real understanding why nobody was willing to play with me. I remember I went into the room where his body lay, and my mother sat weeping alone by it. I had my battledore in my hand, and fell a-beating the coffin, and calling Papa; for, I know not how, I had some slight idea that he was locked up there. My mother caught me in her arms, and, transported beyond all patience of the silent grief she was before in, she almost smothered me in her embraces; and told me in a flood of tears, Papa could not hear me, and would play with me no more, for they were going to put him under ground, whence he could never come to us again....."(12)

又 Addison の執筆で *Spectator* に連載された Sir Roger de Coverley の言行は、当時の田紳を彷彿させる見事な性格描写で、小説の発生を予見させるものがある。

次に日記文学は十七世紀後半、同時代人であつた Pepys と Evelyn の diary

会改革に先行して起つたことがわかる。然し Defoe の時代から海外貿易に依る利潤、河川を利用した運輸（主として石炭の輸送）、羊毛と綿織物の増産、農産物の市場開拓などが着々と進行して居つたことは、彼の雑書に現われている通りである。Trevelyan の *English Social History* が説明する様に⁽⁹⁾、Anne 女王及び George 一世、George 二世の治世には、まだ農民や職人の古風な生活様式は残つて居たが、非常に改善された状態になつて居た。即ち貿易業者の事業が農民や職人の生産物に対する新しい市場を開拓した結果、彼等の中世的の貧困を救助しつつあつたのである。この様な庶民の富と生活の向上は、彼等にかつてない精神上の余裕を与えたのである。かくて上流社会の占有であつた読書の風習が、一般大衆にも及んで、広範囲な読者層が形成されたのである。その一方民衆作家としての小説家も、貴族に献本してその庇護を受ける在来のしきたりから、商業主義の出版形式に依存するようになった。そこで、新しい文学の温床は、patron を離れた作者と、生活にゆとりの出来た読者層との協力に依つて、培われたと言えよう。社会史的な観点から、興味深い「小説序説」を書いた Arnold Kettle の次の短い一節がこの事情を要約していると思う。

“Or the novel, we may say, grew with the middle class, a new art-form based not on aristocratic patronage but on commercial publishing, an art-form written by and for the now-powerful commercial bourgeoisie.”⁽¹⁰⁾

次に、宗教も亦著しい変革を余儀なくされて居つた。一体、当時の中産階級の多くは、Cromwell 時代の Puritan の子孫で、従つておおむね非国教徒の地位も高上し、非国教徒教会の存在は（今なお不愉快な事実ではあつたが）事実として認めざるを得ないようになった。名誉革命以前の弾圧と思ひくらべて、格段の変化と言えよう。又十七世紀の僧侶達は衆人を導くという態度で説教をし、説教の内容も哲学的な古典の引用に満ちたものであつたが、世紀末頃から会衆の理解し得る標準語を用い、layman の理性に訴える形式に変わりつつあつたということである。この意味では、宗教も亦英国散文の発達に大に寄与したわけである。⁽¹¹⁾

4

以上で小説発生期の社会的環境を政治、経済、宗教の面から略説したつもりであるが、ここで十八世紀人の「社会生活」が、どう言う経路で文学、特に近代小説に投影されて行くようになったかという点に、文学史の上から簡単にふれて見たい。近代小説が「平凡な人間生活の描写」を主題とすると言う意味では、小説の発生をうながす文学形式として、essay や periodical や diary が大きな寄与をなしたことが考えられる。

essay は周知のように、十六世紀から十七世紀にかけて、フランスに起り、Mon-

affliction, and death, for the former things are passed away.”⁽⁷⁾ と言っている。

Bunyan が *The Celestial City* に於いて得たものを、Defoe は地上で発見したのである。Defoe のこの現世の謳歌は結局彼の時代の反映と見るべきではないだろうか。この庶民謳歌の気風が、これまでの宮廷や貴族中心の文学を離れて、庶民自身の新しい文学のジャンルを開拓し、彼等自身の生活を描写した小説の発生となつたことは、事新らしく述べるまでもない。

3

さて小説発生期の時代を簡単に概観すると、まず Golden Age と謳われた Anne 女王の治下に始まり、続いて George 一世及び George 二世の三代の治世を、1 epoch にくぎることが出来ると思う。女王の登極が 1702 年で二世の退位が 1760 年のことであるから、凡そ半世紀にわたる期間のことである。当時名誉革命は既に先王 William 三世の時に終り (1689)、England と Scotland が合併して大ブリテン王国が形成された (1707) 時である。Anne 女王の歿後その親族であるドイツの Hanover 公が王位を継いで George 一世と称した (1714)。これが Hanover 王朝の祖で英国の現王室の開祖に当るわけである (但し 1917 年ドイツとの第一次世界大戦中王室名を Windsor 家と改称した)。ところが George 一世はドイツで成人して、所謂 true-born Englishman ではないので、イギリスになじみが薄く、閣議を主宰することも出来なかつたため、国政は専ら内閣にゆだねられ、Whig 党の主領 Walpole が局に当つて責任内閣制度が創設された (1715)。「国王は君臨すれども統治せず」と言う伝統が起つた由来である。因に保守党の前身の Tory と後の自由党となる Whig の二大政党が対立して政党政治が芽生えたのは、これより約 20 年前の William 三世の時である。Leslie Stephen はこの時代の特徴を「民主主義権化時代」と一言で明快に表現して居る。⁽⁸⁾

経済の方面にはもつと重大な社会的変革の兆 (きざし) が現われつつあつた。それは上述の政治上の革新以上に英国史にとつて、否むしろ世界史にとつて意義を持つ大事変であつた。機械工業の勃興に依る新しい社会の確立には、まだ数十年の歳月を要したが、近代資本主義社会が生まれようとする胎動は、既にはじまつていたのである。しかもその中核をなす役割は、貴族や僧侶を離れて中産階級の手に移つて居つた。そこで、当代の経済と文学の相関々係を年代順に少し考えて見ると、所謂産業革命の起源となつた John Kay の fly-shuttle (飛梭) の発明は 1733 年で、Swift の *Tale of a Tub* や *The Battle of the Books* (共に 1704 年出版) が世に出てから約 30 年後のことであり、Hargreaves の Jenny 紡織機の発明は 1767 年で、Goldsmith の *Vicar of Wakefield* (1766) も既にその前年に出版されている。更に Arkwright (1768), Crompton (1779), Cartwright (1785) 等の機械の発明は十八世紀中葉から世紀末にかけてのことであるから、新興の文学は社

脱し、新しい資本主義社会へ移行しつつあつた時代である。従つて国民精神も新しい希望に燃えて、これまで貴族・僧侶の下積となつていた所謂中産階級が、自負の意気を与えられたのである。Crusoe の父は中産階級を礼讃して

“....that the calamities of life were shared among the upper and lower part of mankind; but that the middle station had the fewest disasters, and was not expos'd to so many vicissitudes as the higher or lower part of mankind; nay, they were not subjected to so many distempers and uneasiness, either of body or mind, as those were who, by vicious living, luxury, and extravagancies on one hand, or by hard labour, want of necessaries, and mean or insufficient diet on the other hand, bring distempers upon themselves by the natural consequences of their way of living; that the middle station of life was calculated for all kinds of virtues and all kinds of enjoyments; that peace and plenty were the hand-maids of a middle fortune; that temperance, moderation, quietness, health, society, all agreeable diversions, and all desirable pleasures, were the blessings attending the middle station of life; that this way men went silently and smoothly thro' the world, and comfortably out of it, not embarrass'd with the labours of the hands or of the head, not sold to the life of slavery for daily bread, or harrassed with perplex'd circumstances, which rob the soul of peace, and the body of rest; not enrag'd with the passion of envy, or secret burning lust of ambition for great things; but in easy circumstances sliding gently thro' the world, and sensibly tasting the sweets of living without the bitter, feeling that they are happy, and learning by every day's experience to know it more sensibly.”⁽⁴⁾

と述べている。『このような生活は人々が皆羨む境遇だ。王侯といえども高い身分に生れたみじめさを悔むことが多く貴賤の両極端に置かれることを望んだものだった。』⁽⁵⁾とも言うている。これを見ても当時の庶民の意気は想像出来るだろう。Defoe のこのような楽天主義を、半世紀前に出た Bunyan の場合と較べて見ると、Defoe はあくまでも現世の快適な生活を追求するのを motif にしているのに、Bunyan は全く class struggle に関心がなく、ひたすら内心の魂の闘いに生きがいを見出している両者の対比に我々は興味を覚えるのである。即ち Defoe の世界は ‘a life of ease and pleasure’⁽⁶⁾ であるのに、Bunyan は苦難の多い現世の旅路の終りでやつと天国にだどりいて始めて、

“There you shall not see again such things as you saw when you were in the lower regions upon the earth, to wit, sorrow, sickness,

言う *novel* は十八世紀に出発して、十九世紀に最盛期に達したもので、「物語」中の特殊な文学形式である。Richardson の *Pamela* にその淵源を求めるのが文学史の常識であることは周知の通りである。英国では十六世紀の Sir Philip Sidney の *Arcadia* まで溯ぼることを試みる人もある。たしかに、此の物語の中には現代の読者でも満足する様な小説の要素の若干を含んでいるだろう。然し厳密な意味での小説とは言い難い。そこで小説と物語とを、はつきり 区別する 必要がある。

小説はまず散文である。多くの初期「物語」は韻文であつた。Chaucer の *Troilus and Criseyde* も小説の要素は多分に持つているが、只それは韻文である。Scott や Byron はこの種の韻文物語で成功した最後の作家である。Scott は韻文が与えることが出来ない幅と広さを散文に求めて、小説作家に転じた。そこで彼は「物語」を語つただけでなく、「物語」を通して「何物」かを描写したのである。即ち小説は物語と同時に性格や社会的背景を描写するものである。只小説家が如何なる野心を持つていても物語という原始的な要素から逃れることは出来ない。だから小説とは、物語に基礎を置く散文で、其の中で作家は性格を描写し、感情を分析し、男女の環境に対する反応を捕らえ、かくて社会的背景の中に人生を探求するものだと言えないだろうか。

こう言う小説文学は十八世紀のはじめに、Richardson, Fielding を出発点とし、更に彼等の前に Defoe が出て、ロマンスから近代小説への橋渡しをしたと言うのが文学史の定説である。これ等の初期小説が起る機運が醸成されつつあつたのは 1700 年代で *Robinson Crusoe* は 1719 年に出版されている。近松門左衛門の死亡数年前のことで、「源氏物語」の執筆された寛弘年間を西暦 1000 年代と推定すると、英国の本格的小説はそれから 700 年も遅れて発生したことになる。それは英国に於ては詩について、劇が長く文学の王座にあつて、小説文学が入つて来る余地がなかつたと言うことの外に、小説が成立する社会的条件がそれまで確立しなかつたことに依ると思われる。

2

ところが十七世紀の末葉から十八世紀の初頭にかけて英国の社会にも小説発生の機運が漸く芽ばえて来て、歐洲大陸のイタリヤ・フランス・スペインのような散文文学の先進国よりも半世紀も先んじて、リアリズムの洗礼を受けた近代小説の出發を見て、更に Richardson を通して Cazamian の言う 'Novel of Sentiment' の作風を彼の国々に逆輸入させた現象は一体何に依るのであろうか。

McCutcheon は "The course of English literary history from 1700 to 1789 was affected only slightly by the rulers or by political events."⁽³⁾ と断じている。即ち十八世紀の英国文学は、大体に於いて權威に依つて抑圧されない文学であつたのである。当時の社会は政治も経済も宗教も漸次封建制度の羈絆を

初期英国小説の社会的背景⁽¹⁾

(The Social Background of the Earlier English Novels)

平 敷 安 貞

1

小説は文学の行き着いた最後の形式である。そして現代は小説の時代である。映画やラジオやテレビが、やがて小説にかわる文学形式にまで発展する時代を仮想するとしても、今のところはまだ小説の王座にはゆるぎがない。詩は既に民衆の心を離れて孤高な世界を形成しつつある。比類のない英詩の伝統にも、この宿命は避けられなかつた。結局、文学は T. E. Hulme の言を俟つまでもなく所謂 'life-communicating' のものであつて、作者の感動に依つて創作されたものが、読者層の感応に依つて社会的存在の意義を持つからである。英国に於けるこの辺の事情を B. Ifor Evans は次の様に述べている。

"In the discussion of poetry it is well to remember that verse is not widely read in Britain today : no poet commands the large audiences of Scott, Byron and Tennyson. The large reading public in Britain is a public for fiction and not for poetry. No longer does poetry enter into the national life of the court and of the circle of the ruling elements in the country as it did in the Elizabethan age. The space given to poetry in journals and magazines is meagre and the broadcasting services have been unadventurous in making poetry available to their large audiences. Industry, commercialism and science have all aided one another in driving underground the life of myth and of the imagination."⁽²⁾

英詩の伝統は今や主として学者の擁護にまかされた。正確な editions の発行も適切な解明も続けられては行くだろう。然し詩の生命は学者の編纂する決定判のみで持続されるものではなく、それは民衆の口にのぼることに依つて保存されるものである。然るに十八世紀に出發した商業主義機構の社会では、民衆は詩を忘れがちである。民衆の生活が散文的になるに従つて、彼等の持つ文学も詩にかわつて小説になつたのである。

小説の起源を推定することは、国家の紀元と同じく確定した date に溯ることは容易でない。唯小説の基本的にして原始的な要素である 'story-telling' だけから見ると、所謂「物語」は広く文学の諸形式に分布されている。古代から中世にかけての epic や ballad や anecdote や romance は皆「物語」である。然し今日